

西洋建築史第11回

バロック3－絶対王政の建築

中島 智章

序.文化とは知と富の偏在である

- 教権と王権→バロック建築の二大パトロン←建築だけでなく絵画、彫刻、庭園などを包含する総合芸術=知と富の集積
→他の芸術の場合は市民も←絵画、彫刻、文学なら市民も支えられるし、音楽にしても建築ほど金がかからない
- 教権:ローマ教皇、各地の大司教や司教...→司教座聖堂、参事会聖堂
王権:ヴァロワ家→ブルボン家、ハプスブルク家...→宮殿、軍事施設(都市防御システム、城塞=citadelle)
自治権:市長、市参事会、同業組合...→市庁舎、grand place、同業組合の建物群、コーヒーハウス(情報交換、コンサート)
- 絶対王政の進展:Henri IV→Louis XIII+Richelieu→Jules MAZARIN→Louis XIV(1638-1643-1715, le Roi-Soleil)

1.太陽王のヴェルサイユ宮殿

- 施主:Louis XIV(1638年生、1643年即位、1715年没)→「国境線」の安定+建築・芸術・文学・音楽などの文化振興
建築家:LE VAUフランソワ・ドルベ→(François d'ORBAY)→HARDOUIN-MANSART
芸術家:LE BRUN(画家)、LE NOSTRE(造園家)、その他多くの画家・彫刻家...
文人:Charles PERRAULTなど(小アカデミー)+Jean-Baptiste COLBERT(財務総監・建設長官)
- 沿革:Louis XIIIの狩猟館(1623-24)→改築(1631-34)
→サーヴィス棟と厩舎の増築(1661-)→テティスのグロット(1665)
→新城館=「包囲建築」の建設(1668-70)→大使の階段の建設(1675)
- スペクタクルの石化→国王のappartement天井画=七惑星主題
王族の住宅の平面→サロン サール キャビネenfilade, サール・デ・ギャルド アンティシャンブル シャンブルsalon, salle, cabinet, appartement: salle des gardes→antichambre→chambre

広間名(機能)	広間名(七惑星)	惑星名	ギリシア神名	ラテン神名	司る領域
広間	ディアーンヌの間	月	アルテミス	ディアーナ	狩猟と航海
衛兵の間	マルスの間	火星	アーレス	マルス	戦争
控えの間	メルキュールの間	水星	ヘルメス	メルクリウス	科学と芸芸
寝室	アポロンの間	太陽	アポッローン	アポッロー	「寛大」と「壮麗」
閣議の間	ジュピテールの間	木星	ゼウス	ユーピテル	「憐情」と「公正」
小寝室	サテュルヌの間	土星	クロノス	サトゥルヌス	「賢明」と「秘密」
広間	ヴェニユスの間	金星	アフロディーテー	ウェヌス	愛と美

→人文主義の伝統に属する七惑星主題は天動説由来だが、アポロンの間を中心に配置して地動説も取り入れたか。

- 庭園の東西軸線:テティスのグロット←四大元素関連の彫像←ラトーンの泉水←アポロンの戦車の泉水
- ファサード彫刻
双魚宮、宝瓶宮、磨羯宮、人馬宮、天蠍宮、天秤宮、処女宮、獅子宮、巨蟹宮、双子宮、金牛宮、白羊宮
→鏡の間の造営後、天秤宮と処女宮の間にアポロン像とディアーンヌ像が挿入される

2.太陽神の宮殿から「Louis XIVの世紀」の宮殿へ

- D'ORBAYの後、HARDOUIN-MANSART主導→1682年5月6日、事実上の遷都
→閣僚の翼棟(~1680頃)、南翼棟(1678-82)、大厩舎・小厩舎(1679-82)、大付属棟(1682-84)、北翼棟(1685-89)

ロベール・ドゥ・コット
HARDOUIN-MANSART + Robert de COTTE(1656-1735):大トリアノン宮殿(1678-89)の列柱廊、礼拝堂(1699-1710)

●鏡の間の建設(1678-86)と鏡の間の天井画主題の変遷

1)アポロン神話に基づく計画案→神々の懲罰

2)エルキュール(ヘラクレス)神話に基づく計画案→12の難行

3)「国王の歴史」に基づく計画案→実現案

1661年の親政開始以来のLouis XIVの功業+オランダ戦争(1672-79年)→開戦からネイメーヘン和約まで
←大使の階段(1675~)の図像計画(神話+戦争)

●各絵画の説明板の言語:古典語(ラテン語)→現代語(フランス語)

「フランス式オーダー」のためのコンペ→鶏=ガリアの象徴、百合=王家の象徴、太陽=Louis XIVの象徴

←神聖不可侵の古典古代の相対化=新旧論争

●鏡の国産化→鏡の間→COLBERTの殖産興業政策を目に見える形で陳列

3.列国に乱立する小ヴェルサイユ

●スペインの宮殿建築:兄系ハプスブルク家からブルボン家へ

グランハ宮殿の庭園(ラトヌの噴水)

マドリード王宮(1736-64、正方形中庭と大階段室)→カゼルタ王宮(ナポリ、1752-74)

●オーストリアの宮殿建築:弟系ハプスブルク家

FISCHER VON ERLACH: シェーンブルン宮殿(ウィーン、1696~)

ヨーハン・ルーカス・フォン・ヒルデブランド
Johann Lukas von HILDEBRANDT(1668-1745): 上ベルヴェデーレ宮殿(ウィーン、1721-23)

●Nicodemus TESSIN, den Yngre(1654-1728): ドロットニングホルム宮殿(1662-1700)、ストックホルム王宮(1697~)

ベルリン王宮(1698-1706)、サン・スーシ宮殿=無憂宮(1745-47)、NEUMANN: ヴェルツブルク司教宮殿(1719-44)

Matthäus Daniel PËPPELMANN(1662-1736): ツヴィンガー宮殿(ドレスデン、1711-22)→フリードリヒ・アウグスト強健公

François de CUVILLIÉS(1695-1768): ニュンフェンブルク宮殿内アマリエンブルク離宮(ミュンヘン、1734-39)

●Sir John VANBRUGH(1664-1726): カースル・ハーワード(1699-1726)、ブレナム宮殿(1705~)→イギリス式庭園も

サント・ペテルブルク冬宮=エルミターージュ宮殿(1754-62)

フィリッポ・ユヴァッラ
Filippo JUVARRA(1678-1736): ストゥピニーヅ宮殿(トリノ、1719-33)

4.貴族住宅と百花繚乱のロココ様式

●貴族住宅の基本的平面←貴族社会の反映

Jacques-François BLONDEL(1705-74): 貴族住宅の定型

→左右対称に夫妻のappartement併置

+応接・社交の間が重要

+控えの間の存在(主人と同じ場にいられないが近くに仕えねばならない召使いが控える)

+不整形敷地に左右対称性

アントワーヌ・ル・ボートル *Antoine LE PAUTRE(1621-79): ボーヴェ邸館(1654-60)、ジャン・クールトンヌ Jean COURTONNE(1671-1739): マティニョン邸館(1722-24)

●王妃Marie-Thérèse没(1683)→ヴェルサイユ宮殿国王のappartementの移動:大理石とスタッコ装飾→金と白の羽目板

牛眼の間(第2の控えの間)と国王の寝室(1701)→羽目板中央の装飾が発展して貝殻ロカイユ状に→Style Rococo

●貴族や富裕な都市住民の住宅の内装としても普及

Germain BOFFRAND(1667-1754): スービーズ邸館(1737-39)、特に2階の楕円形広間(プシュケーの物語の天井画)

●内装の変遷: Style Louis XIIIトレーズ→Style Louis XIVキヤトルズ→Style Régenceレジャンス→Style Louis XVキャンズ→Style Louis XVIセーズ→Style Empireアンピール